

『東方』三三四号より

チベット語の歴史と羌系諸語の 類型構造を鮮やかに描く論文集

池田 巧(京都大学人文科学研究所)

チベット系諸語の研究者として知られる黄布凡教授の論集が刊行された。黄教授はかつて一九九三年に国立民族学博物館で開催された第二六回国際シナチベット言語学会議に参加、流暢なチベット語で各国の研究者と交流されていたので、ご記憶のかたもおられるだろう。収録する論考はいずれも、チベットⅡビルマ諸語の歴史研究と類型論への貢献のみならず、チベット史およびチベット文化圏の人類学研究にとっても卓越した問題提起と分析が含まれていて参考価値が高い。しかしながら黄教授の研究経歴については、一部の専門家を除き知る人は少ないと思われるので、本稿では黄教授の談話をもとに本論集に結実した研究の背景についてご紹介したい。

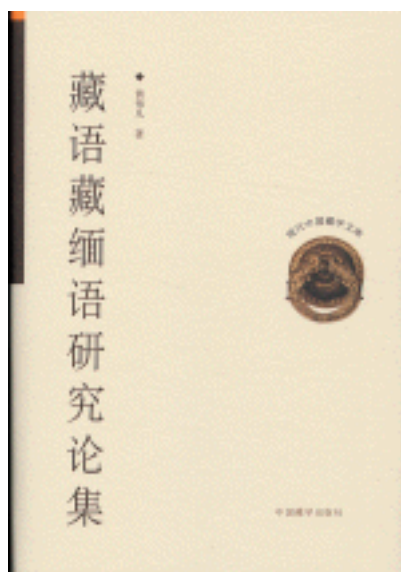
黄布凡教授は江西省の出身。一九五〇年に南昌大学に入学した時にはロシア文学を志すひとりの少女であった。翌年、北京大学の東方語文系が全国から学生募集を行ない、学校推薦でチベット語専修課程に進学する。チベット語を選んだ理由は、推薦登録が遅れたので他の言語の専攻がすでにほぼ埋まっていたのと、好きだったロシア文学の影響で辺境の貧しい人々を勇気づける仕事がしたいと思ったからだという。学生は二年生がわずか二名、一年生の採用もやはり二名で、同級生はのちに中央民族大学でチベット学の教授となる羅秉芬であった。当時の北大東方語文系の主任は季羨林教授、指導教授は著名なチベット学者の于道泉

▶ [トップページにもどる](#)

黄布凡著

『藏語藏緬語研究論集』

中国蔵学出版社・二〇〇七年・二、四九九円



教授で、言語学は馬学良教授に学んだ。

ところが五月に北大に入学して二カ月学んだところで、中央民族学院(現在は大学)が創設されることになり、于道泉教授の兼任出講に従い、北京大学に籍を置いたまま民族学院の第一期の学生となった。創立当初の計画では、チベット語専攻の学生は二年間の課程卒業後、チベットに赴き語学を活かした仕事に就くことになっていた。黄教授自身もチベット行きを希望していたのだが、民族学院はさまざまな専修や基礎科目の整備が必要な立ち上げの時期にあったため、卒業後は馬学良教授の助手として学校に残った。やがて中国国内の民族語専修は民族学院が担当し、北大の東方語文系は外国語を学ぶ専門課程として編制が整えられる。

民族学院の在学当初は、雍和宮のモンゴル人ラマにチベット語文を習ったが、のちに現地実習も行なわれた。と

はいえ揺籃期にあつてラサを含む中央チベット地区へは行けなかったため、かわりに軍の慰問団に従い、民国時代に西康と呼ばれたカム地区に行き、半年間滞在した。成都から二郎山を越えてカンディン（康定）をとおり、現地で召集された幹部候補生の漢族とチベット族の学生も合流して、総勢約百名が数カ月の時間をかけて雪道を歩き、ミニヤコング山の麓に到着、学生はそのままコンガ寺に合宿してチベット語とチベット文字を学んだという。今日のような快適な自動車道やアウトドア用品などの装備がない時代のことであり旅の困難は想像を絶する。のち教員になってからは、六〇年代に二度、工農兵のチベット人を引率してラサで実習をする機会もあった。その後は退職までずっと中央民族学院にて教鞭を執り、さまざまな授業科目を担当、多くの学生を指導しつつ研究を行なった。

古代チベット語の文献研究に携わったのも、仕事の必要からで、文革期には子供が小さかったこともあって、農村に行かず大学に残り譚其驤主編『中国歴史地図集』（中国地図出版社、一九八二年）の編集に参加、于道泉教授の指導のもとでチベットの古地名を比定する作業に従事したことがきっかけであった。古代チベット語文献の分析研究に必要なチベット語史、文献学、漢藏文化交流、漢語音韻史などの専門知識はいずれも教務の必要から「自学傍聴」して学んだ由である。文革が終息し一九八〇年に中央民族学院に言語研究所が設立されたのを機に研究に専念できる環境に移籍すると、大学の近隣に移転してきた北京図書館からパリで刊行された写真版の『フランス国立図書館蔵チベット文献選集』（一九七八―七九年）および関連する著作や論考を借りて敦煌文献の研究を行なった。

いっぽう羌系諸語の現地調査は、一九五六年六月から一

▶ トップページにもどる

九五八年二月にかけて中国科学院が組織した全国少数民族言語調査に参加して四川省北部の山岳地帯のチアン（羌）語を記録したのが最初の本格的な記述研究の機会であった。ところが調査資料はすべて提出させられて手元には何も残らなかったため、後に学内外で発話協力者を探し、かつて調査した地域に近い方言を再調査して、データを収集し直している。八〇年代以降は、指導していた学生の実習を兼ねて四川省の「川西民族走廊」と称される地域に赴き、羌語支の諸言語の現地調査を精力的に行ない、文法の概要を整理した個別言語の調査報告を次々と発表したほか、『藏緬語族語言詞彙』（中央民族学院出版社、一九九二年）というチベットⅡビルマ諸語の対照語彙集を編纂、また総論として馬学良主編『漢藏語概論』（民族出版社、二〇〇三年）の第2章に羌語支諸語の類型構造を詳述しており、いずれもこの分野における必読の先行研究となっている。

このたび上梓された黄教授の論集は、書名が示すように内容を大きく二部に分け、上編には〈藏語〉つまりチベット語の歴史と現代方言についての論考一二篇、下編には〈藏緬語〉すなわち中国国内で話されるチベットⅡビルマ系諸語のうち〈羌語支〉としてグループ化される言語の諸特徴の分析、および調査データの比較から歴史的变化を跡づけた論考一七篇を収録する。再録にあたり、初出誌では紙幅の関係で短縮あるいは割愛せざるを得なかった部分を補い、完全原稿に復元して収録したほか、誤植も著者自らが可能な限り訂正した。また各論文の末尾には、初出の掲載誌名のみならず、論文を提出して報告を行なった学会や、英訳の掲載誌名の記載もあり、正確な書誌情報がわかる。論文は発表年代に関わらずテーマの関連性を重視した配列で読みやすい。以下に収録論文のタイトルを日本語に訳出

しておく。いずれも主題を明確に示しているので、目次を一覧するだけでも黄教授の研究の概要を知ることができる(便宜のため、収録順に番号を付しておいた)。

【上編】

- (1) 一二—一三世紀のチベット語(中央方言) 声母の研究
- (2) チベット語方言における声調の発生と分化条件
- (3) バルティ方言からみた古代チベット語の発音
- (4) ジュクンド(玉樹)チベット語の発音特徴と歴史的変化のメカニズム

- (5) ペマ(白馬) 語の帰属問題研究——白馬語とチベット語の歴史的比較

- (6) 古代チベット語の動詞の形態

- (7) チベット語語彙の変化の速さと様式——敦煌チベット写本からのサンプルによる統計分析

- (8) 敦煌写本『藏漢対訳語彙』残巻の考証と訂正

- (9) 敦煌写本『藏漢対訳語彙』残巻の校訂総録と残された問題

- (10) 敦煌写本『尚書』四篇の古代チベット語訳の研究

- (11) コデンがサキャパンデイタに与えた招聘状の翻訳とその歴史的背景

- (12) シャンシュン地理歴史考——シャンシュン文明が吐蕃文化に与えた影響

【下編】

- (13) チベット⇄ビルマ諸語の声母が韻母に与えた影響について

- (14) チベット⇄ビルマ諸語の動詞の確認性

- (15) チベット⇄ビルマ諸語の動詞の方向性

- (16) チベット⇄ビルマ諸語の指代↓名 修飾構造の語順

- (17) 原始チベット⇄ビルマ諸語の動詞接尾辞*sの痕跡

トップページにもどる

- (18) 原始チベット⇄ビルマ諸語の使動の動詞前接辞*sの痕跡

- (19) チベット⇄ビルマ諸語の「馬」と古典中国語の「騾」

- (20) 同源語比較語彙表の選定範囲と基準——チベット⇄ビルマ諸語の同源語比較語彙表の製訂を例として

- (21) チベット⇄ビルマ諸語の同源語からみた民族集団の先史文化

- (22) 言語の変異についての私見——チベット⇄ビルマ諸語の調査経験から

- (23) スタウ(道孚) 語の音声と動詞の形態変化

- (24) チアン(羌) 語の音韻変化における鼻音排除の傾向

- (25) チアン(羌) 語の「体」範疇

- (26) チアン(羌) 語の語構成の接辞に反映した羌族の事物分類についての思惟特徴

- (27) 西夏語の「」を表わす数詞

- (28) 観音橋方言の帰属問題の研究

- (29) ラヴロン(拉塢戎) 語の語彙におけるチベット語からの借用語と同源語の弁別と分析

黄布凡教授の研究は、文献の解説においても活きた言語の調査においても、精密な観察を基礎として複雑な言語現象を丁寧に整理分析していく姿勢に貫かれている。われわれ外国人も中国での現地調査がかなり自由に行なえるようになった今日、黄教授の研究は海外の研究成果や研究理論の進展を十分に参照し得ていないという点を挙げて、記述や分析が不十分だと批判をする人もいるようだ。しかし困難な時代状況のなかにあつて、中華文化圏からすれば辺境であり、政治的にも難しい地域の言語を研究対象として、真摯に言語事象の観察と記録を行なってきた黄教授の世代の研究があればこそ、好条件に恵まれたわれわれがより発

▼『東方』324号より

四 チベット語の歴史と羌系諸語の類型構造を鮮やかに描く論文集

▲ 池田 巧

展的な研究を自由に展開できることに思いを致すべきであろう。その意味で黄教授の諸論考は、研究の出発点としてまず参照すべき性質のものであり、さらに新たな知見を加え、より洗練された分析を行なうて、言語現象の背後に存在するメカニズムを探索して行くのが、次世代を担うわれわれの責務である。

なお個別言語の調査報告については、別途論集を編集することなので、黄教授の言語調査の全貌を一望のもとにできる日を楽しみに待つことにしたい。

トップページにもどる

▲ 東方書店